

2000年度

新入生の
顔、顔、顔

学生記者

黒澤剛、佐多愛子、竹尾智成
シディキ ムニブ、土井敬士



「2000年度」の文字がまぶしい



改札口を通るにも、この通り

断然

モノレール

福利かす

4月1日多摩校舎、2日後楽園校舎。2000年度という記念すべき入学式が盛大に行われた。今年は卒業式の日程が昨年より2日ほど早まったこと、サクラの開花が例年より遅れたことが重なり、キャンパスの桜もいま一つ。顔をのぞかせたツボミが一生懸命、春の強風に耐えていた。入学式のレポートを担当した私たち新2年生は昨年、入学式を経験したばかり。ことしは私たちの「新しい目」で、多摩キャンパスの新入生の表情を追ってみた。

【ベテ上で】

モノレールの印象としては「便利、景色がきれい」の音が圧倒的に多かった。多摩丘陵を一望しながら走るモノレールは、将来的に交通の中心的存在になるだけでなく、観光面での役割も大きい。

緊張気味の新生者が、ぎこちない

スーツ姿でモノレール駅の方から上ってくる。壮観な眺めである。「去年と違うのは、この光景だ」と学生記者たちは思わず顔を見合わせた。モノレールという新しい交通手段に、学生はどんな感想を持ったか。

富山県から来た学生は「田舎なことから楽しい」といい、「初乗りがとにかく高い。でも、定期券の値下げ率が50%から70%になったので助かりました」。早朝から新入生のために「中大駅」に臨時の切符売り場を出していた、モノレール会社の方



第1 体育館アリーナの壁面が映し出す「春」



モノレール(正面)が着くたびに、あふれる人

大学の波に流されてみたい

は「礼儀正しい学生が多いですね。モノレールをもっと、もっと良い乗物にしていきたいです」と胸を張って答えてくれた。学生記者一同、ホッ!

キャンパスに着いた新入生を先ず迎えてくれたのはサークル勧誘だった。ピラを持った先輩たちが、新入生の行く手を阻むように待っている。「おめでとございます。サークル

決めた？」とピラを手渡す。花ピラの代わりに、キャンパスを舞うピラ。勧誘する側も「こちらはドキドキ、新入生はオドオド。去年は邪魔だかなと思ったが、渡す側になって気持ちが変わった。勧誘も楽ではないですね。」

ペデ上を歩き来する、さまざまな学生に手当たり次第に声をかけてみることにした。「大学に期待することとは」と質問したら、いかにも新入生らしい答えが返ってきた。いきなり「都心に大学を移してほしい」というものだった。ウーン、これだけではどうしようもない。次に「学習面でのサポートがほしい」「自分の長所を伸ばしてくれるシステムがほしい」という声が聞かれた。私たちは「中大は学習面のサポートに関しては、他大学より充実している。結局

は自分にやる気さえあれば、その意欲に応えるだけのシステムはあるはずだ」と答えておいた。

文学部教育学科に入るのに「学校の先生だけにはなりたくない」という女性がいいた。「とにかく、いつばい遊んで、将来は長内先生（前法学部長）より偉くなりたい」と元気に答えてくれた。そんな中で、「私はあえて大学の波に流されてみようと思います」といった女性が特に印象的だった。4年間の大学というステージで、大きく成長していく彼女の姿が目に見え、卒業時に「大学生活はどうでしたか」と取材してみたいと思った。

いずれもはつきりとした答え方をしてくれたのは女性ばかり。「やっぱり、女性の方が元氣なのかな」と実感した。

このあと、陸上のスポーツ推薦で中大に入学した4人の体連部員に会った。南平に体連の寮があり、彼らはもう1カ月ほど生活している。彼らは勉強面でも強い意欲を持っており、質問の対応ぶりも好印象を持った。

最後に留学生。中国の高校を卒業

後、日本で1年半、日本語を勉強して商学部に入った21歳の女性だった。「自分の専門の勉強だけでなく、パソコンを使えるようになりたいし、サークルにも入りたい」。そして「将来は中日の架け橋になるような仕事をしてみたい」と意欲的に答えてくれた。

どうも学内では留学生は留学生同士で固まる傾向があるらしいが、日

本人学生だつて留学生と交流することを望んでいる。「お互いをもっと接する機会を作ろうと努力した方がいいのになあ」と思った。

【入学式場で】

式は管弦楽部の素晴らしい演奏で始まった。鈴木学長からは中大の成り立ち、OB・OGの活躍、質実剛健といわれる中大の校風、大学生と

中日の架け橋になるような仕事を

きに頑張れるように、個性になつた目標を早い時期に見つけてほしい」とおっしゃった。

式後、新入生に感想を聞いたら「現実的でよかった」「決意を新たにしました」「長かった」と、いずれもコメントはたった一言ながら、中身はさまざまだった。この質問を父母の方たちに振つたら、ある父親は「お話にあつたように、子供には自立心を持って欲しい」とのコメントだった。確か、昨年の祝辞のなかにも、「生徒と学生の違い」というものがあった。要するに、その違いは自主性があるかないかである。ことしの学



折りからの春の強風に揺れる校旗

長・理事長のお話も同様に、大学生は自主性が大切だということ強調されていた。これは新入生のみならず、すべての大学生が意識しておくべき言葉だと思った。校歌に関しては、こども「校歌斉唱」というように、「校歌静聴」という感じだった。

【ヒルトップで】

入学式が終わると同時に、緊張感から開放されたのが、腹をすかせた新入生はドツとヒルトップに直行した。ヒルトップは午後の入学式組と重なって、どこもかなりの混雑だったが、親の同伴が多かったせいか食



新勤ピラを配るアメフト部員



ラクロスのラケットがざして新勤

一人暮らしでも学食があればOK

事を早めにはすませ、席を後に譲るという気の遣いようだった。「こういうマナーを続けてくれればいいんだけどな」と思った。

食事について聞いてみると、味は「おいしい」と、おおむね好印象。「まあまあ」という新入生は、受験と合わせてヒルトップは5回目だった。その5回目の彼がいうんだから「まあまあ、合格」ということ

なんだろう。午後の入学式に出席した新入生が食べ終えるころには、軒並み売り切れ、メニューの数はほとんど減っていた。

新入生のなかには一人暮らしを始める人も多い。ヒルトップで食事のある親に「これからのわが子の食生活に心配ありませんか」と聞いたところ、「メニューも豊富で、サラダも付いているので安心」と、値段

が格安で量が多いことに満足のようだった。

また、新しい生活とはいえ不安もある。

不安の材料としては、自炊、病気が戸締りが多く、水がそのまま飲めないという意見も多かった。病気にについては、ある母親は「もしもの時を考え、大家さんが住んでいるアパートを選びました」といっていた。

【まとめ】

「広報課」の腕章をしていた私たちにとって、4月1日は長い1日だった。この日はやはり、1限より早く出てきて、広報課でスタンバイ新入生の登校を待ち受けた。「今年の入学式を去年の目で見る」ということをコンセプトに、さまざまなテーマの切り方をしようと取材に臨んだが、なかなか思うようにまかせなかった。

「4年で卒業してほしい」に私たちがいわれた気分

ある親御さんに「子供さんに何を期待しますか」と伺ったら、「4年で無事卒業ほしい」「後悔しないような大学生活を送ってほしい」といわれた。なんだか自分たちがいわれているみたいで気恥ずかしかった。

なぜって、私たちがだって新入生の1歳年上に過ぎないのだから……。とにかく、快く取材に応じてくださった新入生の皆さん、本当にありがとうございました。21世紀の中大“を大いに盛り上げましょう。”